

阪大レーザー研・所内版広報誌「Seven Stars」 三浦美樹記者（SS氏）のインタビュー

SS: 今回はどのような会議に参加されたのですか？

高部: 毎年、この時期、同じ所で開催されている「高エネルギー密度の物理」に関する会議。ドイツのGSI（重イオン研究所）が主催。重イオン核融合の人が多く集まる会議でした。毎年、案内を頂いていたのですが、時期的に参加できず、今回、始めて参加しました。

SS: ヒルシェックはどんな町ですか？

高部: まあ、村、ですね。スイスアルプスの北に位置し、スキーの基地になっている。オーストリアですが、お店の価格表示はドイツマルクだけ。このシーズンがスキーの宿泊客が多く、昔は農業が中心だった村も、今や、スキー客が最大の収入源。従って、家を建て替へて民宿を営んでいる家が多い。ホテルもこの時期はスキー客のみ。宿泊代は2週間単位で書いている。3泊4日など、けちな客はいないようだ。

SS: 会議場の雰囲気をお教えください。

高部: 写真にあるようにとても明るい、こじんまりとした部屋でした。とにかく、格式張らない、ネクタイ禁止、ジョーク歓迎、プログラムもどんどん変わる。参加者は70人ほど、ドイツ人とGSIで働いている多数のロシア人がほとんど。手作りのいい雰囲気の会議でした。私は、こんな雰囲気の会議が気に入っています。

SS: 主なレーザー研と関わりのあるメンバーはいらっしゃいましたか？

高部: MPQの理論のボス、Meyer-ter-Vehnを初めとして、レーザー研のピーター杯の送り主、ピーター・ムルザー教授（ドイツにいた時の私のボスでもあった）など。そうですね、参加者の2割は顔見知りかな。でも、始めて会った人が多く、面白い人、今後、長い付き合いになりそうな人と出会えました。友人が増えるのは本当に嬉しいことですね。

SS: 先生は会議でどのようなことを発表されたのですか？

最近、発表が期待されている私のタイトルは「レーザー天体物理」です。昨年、23件ほどセンター外で招待講演などをしましたが、その9割がこれに関係した内容です。今月末

の企画送別会(いつにしようか?)では「秘書のための物理学=宇宙の神秘とレーザーで星をつくる話=」という易しい講演を井上、寿崎さんと約束しています。それを聴けば、ボンヤリとでも、会議での私の話の内容が分かると思います。

SS: 会議で、研究について、何か勉強になること?もしくはこれは進んでいる!と関心されたことは何かありましたか?

高部: ドイツ人は「これ」と決めたことは少なくとも10年は続けてやる。ムルザー氏は30年ほどレーザー・プラズマ相互作用の研究しかしていない。10年ほど前「まだ、やってんの」と、クリスマス・カードに描かれたシミュレーション結果を見てあきれたものだ。ところが、超高強度レーザーが現れて、時代は彼を再びスポット・ライトの下に押し出した。一徹な研究、着実な進歩。20世紀初頭に量子力学に始まる近代物理学をリードしてきた、という自負にも似た自信には、教えられる所があります。

SS: では、研究とは離れて、何かおもしろい話がありますか?

高部: フランクフルト大学の理論物理研究所のマルーン教授というユニークな先生と知り合いになった。彼との日本の古典文学、近代文学の話。是非、私の旅行記を読んでみて下さい。貴方が、彼にあったとき、日本文学について何処まで議論が出来るか、考えてみて下さい。よく言われるように、日本人は外交下手。というのも、物理の会議で知り合っても、物理以外の一般教養がどの程度身に付いているかが、相手との深い理解には必要です。これは、フィッシャー家とのつき合い(旅行記の付録2を読んで下さい)でもひしひしと感じました。特に、欧州では「専門バカは単なるバカ」としてしか扱われないことを肝に銘じましょう。

SS: GSIのPhelixってなんですか?最新情報について何か質問されたら旅行記で書いていらっしやっただと思いたすが。。

高部: 三浦さんも、固い質問が多いですね。「レーザー研病」に侵されているんじゃないの?リラックスして下さい。まあ、いいか。PHILIXレーザーは、現在、GSIが建設中のレーザーで、この増幅器はリバモアにあったNOVAレーザーの10本ビームの1本を購入して使うんです。でも、米国DOEとの交渉が難航している様子です。PHILIXは長い名前の頭字語です。以前、MPQにあったヨウ素レーザーがASTELIXでした。「LIX」には、なにかすがすがしいイメージがあるのでしょうか。

SS: 何度も会議に参加されていらっしやいますが、何か今回はいつもと違うと感じられたことはありますか?またはお気づきになられたことは?

高部： 特にありませんね。会議の出席は「脱日常」の開放感があり、また、「物理にどっぷり浸かれる」という、精神衛生にとっても良い時間なのです。そして、新しい人との出会い。新鮮な会話。どの会議に出てもとても素晴らしいですよ。ただし、農協ツアーのように団体会議に出席するのは苦手です。また、日本人が多い会議も。これからも、新しい研究分野開拓を目指し、日本人の未踏の会議を探し続けたいと考えています。

SS: 高部先生は最近、よく旅行記など書かれていますが、何がそうさせるのですか。

高部： 私は40才ころ体調を崩し、未だに、月に一度は阪大病院に通っています。病気になった頃、「自分の人生って、何だろう」の様なことを考え、日々の総括というか新鮮な出来事、出会いなど、日記を書くようになりました。この頃、丸大ハムのTVコマーシャルで「男が40から始めた習慣は一生続く」等というのがあり「そうだ」と自分を納得させました。その後、日記を書く日が続いたのですが、忙しさに「義務感を感じてはいけない」と、海外出張など時間に余裕があり、かつ、新鮮な出来事、新しい人との出会い、などを中心に書き留めるようになっていきました。所が、2年ほど前、「こんな面白いこと、もっと皆にも伝えたい」と思い、「白夜のサンクト・ペテルブルグ」から、長編旅行記を書くようになりました。目的は、1.海外での「清く正しい」私の行動を報告すること。2.耳寄りな情報を伝えること、3.学者とはどのように外国人と交流し、どんな会話をするのか、など。そして、4.自分の足跡の記録を残しておきたい(いつ死ぬか分からないので)。私の旅行記は、母や故・近藤洋君のお母さん、プラ核学会事務局のきたざわさんなど、固定の愛読者からの感想で支えられています(レーザー研の人から反応がないのが、大変、淋しいですね)。

SS: 外国にどんどん出ていかれる学生、研究員の方々に、日本人研究者としてこうであってほしいと願うこと、またはご自身の経験からアドバイスがあればお聞かせください。

高部： 外国人に限らず、人とのつき合いは、まず、相手を信じることです。そして、「人を裏切るより、裏切られた方が気が楽である」と考えることです。たまには、変なやつもいますが、世界中、何処に行っても良い人間が一杯います。だから、自分から声をかけること。同時に、声をかけて、相手がどんな会話を始めても対応できる一般教養を身につけておくこと。それと、相手に通じるジョークがスーと出てくる程度の語学力と頭の回転力を訓練すること。そうすれば、貴方はパーフェクトな国際人です。

SS: 有り難うございました。